



肝ぞう通信

2024年度 第3号 《 最新の肝ぞうの手術をご紹介します 》

お知らせ

肝疾患医療センターは、肝疾患に関する心配事や悩み事のご相談にお応えしています。当院では、総合相談室が窓口になっております。

場所：病院1階
総合相談室

受付時間：
平日 9:00~15:00
土曜日 9:00~12:00
(第2・4土曜日除く)

豆知識

高度な肝臓・胆道・膵臓手術や内視鏡外科手術の安全性を担保するため、学会により認定医制度が定められています。

次回号

テーマ：(予定)
脂肪肝に対する認知行動療法について

発行責任者

東海大学医学部付属病院
肝疾患医療センター長
加川 建弘

小さな傷の肝ぞう手術とは

肝ぞうは右の肺(はい)の尾側に肋骨の中で守られており、従来手術のためには大きな傷でおなかを開けて肝ぞうをみぞおちに引き出してから切除をせねばなりませんでした。近年、小さな傷による低侵襲手術(ていしんしゅうしゅじゅつ)が進歩し、5mmから12mm程度の小さな傷5カ所程度から細い筒を挿入し、そこから鉗子(かんし)と呼ばれるマジックハンドのような医療器具が入り、おなかを開ける手術と同様に安全に手術が行われるようになりました。鉗子は長いお箸のようなまっすぐの道具ですが、これらもさらに発達し、関節を持った鉗子をAI機能を持ったロボットで操縦するロボット支援下手術が肝ぞうの手術にも導入されてきています。このような小さな傷の手術は、おなかの中を高精度のカメラで拡大して、きれいな画像で観察しながら手術をすすめるので、非常に細い毛細血管もはっきりと見えるため出血量が減少し、傷の痛みも小さいため、手術による総合的な患者さんのお体へのご負担も少なく、近年は術後の平均入院日数は5~6日に短くなってきています。さらに小さな傷は、時間がたつとさらに小さな瘢痕組織に変化し、美容上もすぐれています。また低侵襲手術が導入された時期には、肝硬変や過去の手術既往による癒着が原因で途中、おなかを開ける手術に切り替わることもたびたびありましたが、手術技術や器具の発達により約99%の手術において低侵襲手術を完遂できるようになっています。